

小学校外国語科における異文化コミュニケーション能力向上を目指す研究

～マレーシアの小学生とのオンライン交流が児童の情意に及ぼす影響～



Online Exchange Program 動画

鴻巣市立鴻巣北小学校 教諭 中村 恵美

I はじめに

多様な人々と日常的な交流が拡大する現代において、異なる文化をもつ人々を理解するだけでなく、理解した上で、それらを受容しながら共生することのできる力が重要となる。外国語教育においても、単に英語力を身に付けさせるだけでは十分であるとは言えない。総合的な（異文化）コミュニケーション能力、つまり、異なる他者を受け入れ、予測不可能なこれからの社会を他者と協働しながら生き抜く児童生徒の育成が求められる。

Kachru (1985) によれば、世界の英語人口 17.5 億人のうち、アメリカ、イギリス、オーストラリア等の Inner Circle に属するネイティブスピーカーは 3.2～3.8 億人であるとされている。それに対し、ESL (English as a Second Language) 環境であるインド・フィリピン・シンガポールなどの Outer Circle に属している人口は 1.5～3 億人と言われている。さらに、日常生活において英語のコミュニケーションが必要とされにくい EFL 環境に属する中国・日本・ドイツ等の Expanding Circle に属する人口は 10 億人にのぼるとされている (図 1)。つまり、世界の総人口の 4 人に 1 人ないし 3 人に 1 人は英語を使用しているが、その大多数が英語を母国語としない人々の英語である。

小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説においても、外国語 (以下、英語) を学ぶことに留まらず、英語を実際のコミュニケーションで活用し、相互の考えを伝え合うことや、多様な考え方を尊重し受け入れることが大切であると述べられている。

これらを踏まえると、単に英語力やコミュニケーション能力を伸ばすだけでなく、様々な世界の事柄、文化、宗教、歴史などの国際的な課題を理解し、多様な文化を尊重する人材の育成が重要であると言える。

しかし日本は、EFL (English as a Foreign Language) 環境である。L2 (英語) が生活言語ではないため、教室の外で英語を使ったり耳にしたりする機会が少ない英語習得において不利な条件化にあると言える。

1.1 異文化コミュニケーション能力の定義

本研究における異文化コミュニケーション能力とは、知識や理解といった言語の側面ではなく、「外国語で会話してみたいという気持ち (L2 WTC)」、「異文化を好意的に受け入れること (国際的志向性)」そして「外国語学習に対する動機付け」など、児童・生徒の情意面を指している。

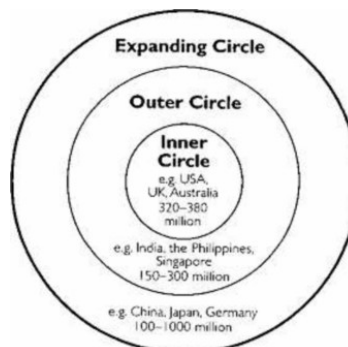


図 1 : Kachru's Three Circles of English (1985)

II 先行研究

2.1 WTC

Willingness to Communicate (WTC) は、コミュニケーションに対する学習者の意欲を表す概念である。L2 WTC とは、特定の場面、特定の話し相手に対して、第二言語 (L2) を用いてコミュニケーションをとろうとする意志のことである。この定義には、外国語でコミュニケーションをとろうとする気持ちは、場面や話し相手によって常に変化し、一定しないことが示されている。この感情次第では、いかに学習者が高い語学力を有していたとしても、その言語を用いたコミュニケーション行為に結びつかない場面がありうる。

2.2 国際的志向性

高い英語力を備えている学習者が、必ずしも英語コミュニケーションに対して積極的であるわけではない。国際的志向性 (International Posture) は Yashima (2002) で示されている概念である。この概念は、ネイティブスピーカーとの日常的な接触がほとんどない日本の EFL 学習者の特徴を考慮して考えられた。特定の L2 集団ではなく、英語が連想させる国際的な職業への興味や異文化への接近など、漠然とした国際社会に対する学習者の態度を包括的に捉えるものである。

2.3 動機づけ

L2 分野における動機づけ研究では、ドルニエイが「動機づけの基礎的な環境の創造」「学習開始時の動機づけの喚起」「動機づけの維持と保護」「肯定的な追観自己評価の促進」といった 4 つの局面を提唱しており、特に「時間の経過による動機づけの変化」を捉えることを重要視している。

この分野の小学生に対する先行研究では、Nishida (2012) が、1年間、106名の小学5年生に対して週に1回の頻度で外国語活動の授業を行い、その間に4度(4月、7月、11月、2月)の質問紙調査を実施した。その結果、多くの参加者が7月以降、学習動機、教科及び学習言語への興味、コミュニケーション能力の認知、WTCの全てにおいて数値を低下させていた。Koizumi and Matsuo (1993)、山森(2004)でも同様の結果が確認されている。

2.4 過去の質問紙の結果

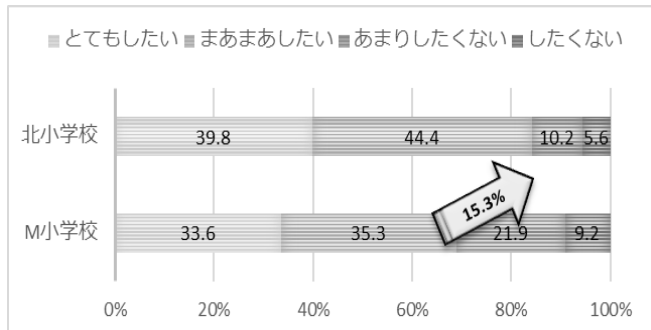
令和5年1月、オンライン交流を経験した本校児童5・6年生と、経験をしたことがない市内M小学校5・6年生に対して質問紙調査を実施した。筆者は英語専科教員としてM小学校に兼務校していた経緯があり、オンライン交流の有無以外は、同じ条件で授業を行っていた。

この調査により、海外の同世代の子どもたちとの交流は、情意面に大きく影響することが明らかになった。図2に見られるように、外国の人との会話に対する意欲(WTC)や、海外へ行くことへの興味関心(国際的志向性)について、交流を行った児童の方が15%以上肯定的な回答をした。

図2：令和4年度の質問紙調査より

<外国の人と話したり、外国に行ってみたりしたいですか？>

R5.1月鴻巣市立鴻巣北小学校5・6年108名/M小学校5・6年119名



上記の理論や先行研究から、以下の3点が浮かび上がってくる。

1. 英語力を伸ばすだけでなく、様々な国の人が話す英語に慣れ親しみ、多様な歴史や文化を好意的に受け取る児童を育成する必要がある。
2. 高い英語力を身に付けていても、英語を使って交流したいという気持ちがなければ、積極的にコミュニケーションをとろうとする行動にはつながらない。
3. 学習意欲の高い学習者でも、英語学習に対するモチベーションを維持し続けるのは難しい。

そこで、ICTを活用し海外の小学生と英語で交流することで、児童のコミュニケーション能力を向上させ、国際的な視野を広げながら、英語学習の意欲を高めることができるのではないかと考え、本研究テーマを設定した。

Ⅲ これまでの実践について

3.1 マレーシアの国立小学校とのこれまでの交流

令和3年度から令和6年度の4年間、勤務校の6年生児童と、マレーシアのケバヤウ・テリポック・コタキナバル小学校の6年生とが、年数回のオンライン交流を実施し、現在も交流を続けている。その実践については、中村(2021, 2022, 2023a, 2023b)で報告している。

3.2 交流方法

日本とマレーシアそれぞれの教室にPCとモニターを1台ずつ配置し、ウェブ会議ツール(zoom)による遠隔授業を行ってきた。すべての児童に交流の機会を与えるため、マレーシアの児童1名に対し、本校児童2名で会話することを基本としている。



【ICTを活用して海外と交流する様子】

先の実践で重視したのは、従来の教師主導型授業ではなく、児童主体型の授業を心がけることであった。教師は知識を与えるだけでなく、児童が課題解決に向かうよう思考のヒントを与える Facilitator (進行役) として徹した。たとえば、児童に「○○は英語で何と言うのか」と聞かれても、すぐに答えを教えるのではなく、「気象予報士はどんなことをする人？」と問いかけて思考を促した。この問いに対し、ある児童が「サニー(Sunny) アナウンサー (Announcer) !」と表現した。これは、授業の初めに学んだ「晴れ」という天気という言葉とニュースを伝える「アナウンサー」という言葉を組み合わせた発想だろう。

このように、児童は仲間と協力し、試行錯誤を通じて既存の知識を駆使しながら表現を工夫するようになった。例えば、「獣医」は「アニマルドクター」、「株取引」は「マネーチケットトレーダー」といった表現にたどり着いた。後にALTから正しい英語表現を学ぶことで、児童は新しい知識をより確かなものにしていった。

自己紹介、自分の町の紹介、日本のおすすめ観光地、自分のヒーロー紹介、将来の夢など、教科書の内容に基づいたトピックを設定し、授業で学んだことを交流で活用できるよう工夫した。一方で、教科書の枠にとらわれず、

児童の興味や関心に基づいた内容も取り入れた。例えば、日本語とマレーシア語を教え合い、互いの文化を紹介する場面では次のようなやりとりがあった。「Thank you はマレー語で何て言うの?」「テリマカシーだよ。」「日本語は『ありがとう』だよ。」こうした交流を通じて、児童たちは共通言語である英語を媒介に言葉の多様性や豊かさを実感することができた。

交流後の児童の感想からも、その充実感が伝わってきた。「最後にバイバイする時に、テリマカシーと言ったら、『ありがとう』が返ってきた。すごく嬉しかった。前よりもっと仲良くなれた気がした。」また、日本のアニメを紹介した回では、「自分の好きなアニメのキャラクターを相手も知っていて、嬉しかった。」「マレーシアの伝統的な生活を紹介するアニメを教えてもらい、興味が広がった。」「マレーシアの伝統的な衣装の中に、男の子もはく「サロン」というスカートのような服があって、なんかいいなと思った。」など、相手の文化を前向きに受け入れる様子が見られた。

3.3 対話例

自己紹介から始まり、姉妹校協定や現地視察の様子を学ぶ過程を経て、児童たちはさらに交流を深めた。以下に示す書き起こしと QR コードは、2023 年 9 月 29 日に実施したオンライン交流での児童同士の対話の一例及びその動画である(図3)。児童たちは好きなアニメのキャラクターや身近な人物など、それぞれの「ヒーロー」を紹介し合った。

本対話の書き起こしには、Walsh (2011) の Transcription System (表1) を基に、実態に合わせた修正を施している。

図3：児童の対話例

1	J1:	hello	 児童の対話動画
2	M:	...hello (手を振る)	
3	J1:	[my name is]	
4	M:	[my name is]= =Amber...what is your name	
5	J1:	one more time, please	
6	M:	hello (手を振る)	
7	J1:	hello my name is Haruto Endo (自分の名札を見せる)	
8	M:	...hello Haruto (手を振る)	
9	J1:	thank you	
10	J2:	my name is Mirika	
11	M:	hello Mirika (手を振る)= =my name is Amber	
12	J1:	hello Amber	
13	J2:	Amber	
14	M:	hello	
15	J1:	...Katakuri is my hero	

		he is strong= =he can look future = =I like Katakuri very much= =do you know One Piece?
16	M:	...yes (笑顔になる)= =that's nice
17	J1:	thank you
18	J2:	Cinnamoroll is my hero= =she is cute= =she can fly= =I like Cinnamoroll very much do you know Cinnamoroll?
19	M:	yes...that's nice
20	JJ:	yes だって〜〜(クラスがどよめく)
21	J1:	thank you (自分の席に帰ろうとする)
22	T:	° 向こうの子言った?°
23	J1:	ahhhh (モニターの前に戻る)= =who is your hero
24	M:	my hero is my mom...= =my mom is like no others= =she is beautiful amazing strong= =and hard working and EVERYTHING
25	J1:	Oh
26	M:	I'm very lucky to have a mother like her= =thank you
27	J1:	oh that's nice
28	J2:	° nice°
29	J1:	thank you see you (手を振る)
30	M:	thank you bye (手を振る)

表1：Transcription System (Walsh, 2011) を基に筆者作成

記号	意味	記号	意味
T:	教師	?	上がり調子
J1, J2, etc:	日本人学習者	!	下がり調子
M:	マレーシア人学習者	Paul, Mary	固有名詞
JJ:	数名の学習者、クラス全体	...	3秒以内の間
[my name is]		(4)	4秒以上の間
[what's your ...]	オーバーラッピング	(laugh)	動作をする
=	会話の継続 間がない	HELLO	強調して言う
/ok/ok/ok/	複数の学習者の同時の発話	° yes°	小声で言う

J1 (日本の児童1) は、コミュニケーションに対して積極的な児童である。それに対して J2 (日本の児童2) は、たくさん会話したいという気持ちは持っているが、普段から控えめな性格の児童である。前述の通り、マレーシアの児童1人に対し、日本の児童2人で対話をしているのは、全ての児童に対話の機会を与えるためである。どちら側から話しかけるか、誰からヒーローを紹介するかと言った順番は決められていない。そのため児童は、相手をよく観察し、会話の流れを把握しながら対話を進める必要がある。

まず、J1 が元気よく挨拶をするが (Line1:以下 L1)、名前を名乗る場面で相手とタイミングが重なってしまい、相手の名前を聞き取ることができなかった。しかし、もう一度聞き返し、粘り強くコミュニケーションを図ろうとする姿が見られる (L5)。日本人の名前はマレーシアの友達には難しいだろうという相手意識から、名札を見せながら自己紹介をしている (L7)。すると M (マレーシアの児童) が名前で呼び返してくれた。続いて J2 も自己紹介を行う。相手に名前を呼び返してもらい、さらには相手の名前を呼ぶことができた (L11)。名札を見せながら自己紹介したり相手の名前を呼び返したりということが、タスクの反復によって J2 の行動につながったと推察される。

続いて J1 が好きなアニメのヒーローについて紹介をし、このアニメを知っているか尋ねる (L15)。すると M は知っていると回答し (L16)、J1 は Thank you と返す。後に J1 に聞き取りをしたところ、「自分の好きなアニメを相手も知っていて嬉しかったので Thank you と言った」と答えている。続けて J2 が自分の好きなキャラクターを紹介する。J1 と同様に、このキャラクターを知っているか尋ねると、予想に反して「知っている」と返ってきたので、クラス中が驚きに包まれた。このインフォメーションギャップが、相手のことをもっと知りたい、という気持ちを促進していると言える。

途中、M のヒーロー紹介を聞く前に J1 が自席に戻ろうとするハプニングもあるが、M の紹介を聞き J1 は途中で「Oh」というリアクションをしている (L25)。M の紹介の最後には「That's nice」と返し、J2 も小さな声ではあるが「nice」と返すことができた。なお、L15, L18, L24 の発言は、事前に準備され練習を行ったもので、presentation (発表) にあたり、それ以外は interaction (即興の対話) と分類できる。

以上の数年にわたる実践を踏まえ、次節では研究課題について述べる。

IV 研究課題

4.1 目的

本研究の目的は、小学校の外国語授業において海外の小学生とのオンライン交流を経験した児童を追跡調査し、その経験が中学生になった際の情意面にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることである。具体的には、情意の中でも外国語学習において特に重要とされる①WTC (Willingness to Communicate)、②国際的志向性、③学習動機に焦点を当て、アンケート調査を実施する。さらに、自由記述欄のデータを基に共起ネットワークを作成し、テキストマイニングを行う。共起ネットワークとは、特定の単語や概念がどのように共起しているかをネットワーク構造で表現する方法である。一方、テキストマイニングは記述データの分

析手法であり、近年、英語教育学や第二言語習得研究においても活用されるようになってきている。

本研究は、「3.これまでの実践について」で引用した中村 (2021, 2022) 及び、埼玉大学教職大学院での1年間の研究を勤務校で実践し、さらに発展させたものである。この実践を出発点とした理由は2点ある。まず、第二言語習得のような学習活動は長期にわたって見とる必要性がある。2点目の理由は、ICTを活用した海外との交流実践は、今後増加することが予想されるが、小学生を対象とした実践や研究はまだ少なく、さらなる検証が必要と考えたからである。

4.2 参加者

令和5年度は本校卒業生である、埼玉県内の公立 A 中学校1年生 (50名)、同中学校2年生 (56名)、計106名に対して質問紙に回答してもらった。回収率は100%だが、過去に交流を経験していない生徒が1名回答していたため、分析の対象となったのは105名分の回答である (有効回答率: 99.0%)。令和6年度も、本校卒業生である A 中学校1年生 (43名) に対して、同じ質問紙調査を行った。参加者は小学校3年生から外国語活動として英語の授業を受けており、質問紙の時点で5~7年余り英語に触れている。参加者に、小学校6年生の時に経験したオンライン交流を振り返りながら回答してもらった。

4.3 調査用質問紙

参加者に対し、WTC、国際的志向性、動機づけの3つの心的概念の学年ごとの値を調査した。本研究の調査用質問紙は、Yashima (2002) の調査を参考にし、Yashima (2012) で大学生を対象として作成された尺度を中学生に応用して使用した。作成にあたり、英語を専攻する大学院生3名から助言を受け、必要となる修正を加えた。概念と項目数は以下のとおりである (表3)。中1・中2とも、心的概念については6件法を用いた。自由記述欄については、テキストマイニングを行う。

表3 質問紙の項目の分類

項目	中1	中2
WTC	2	2
国際的志向性	2	2
動機づけ	2	2
自由記述	1	1
合計	7	7

【項目数】

質問紙の内容は以下のとおりである。

WTC①: 日本にきている外国の人と友だちになりたい。

WTC②: もしできるなら、外国の人とは話したくない。

国際的志向性①: 英語ができるようになったら、海外で学んだり働いたりしたい。

国際的志向性②：海外へ行くより、ずっと地元になりたい。
 動機づけ①：マレーシアの小学生とのオンライン交流は、
 心に残っていますか？

動機づけ②：あなたは、オンライン交流が英語学習のやる
 気につながっていると思いますか？

回答者が質問文を十分に把握せず、単に同じ数値で回答する傾向を把握するため、WTC①②、及び国際的志向性①②では、敢えて肯定的及び否定的な言い回しを採用した。否定的な表現への回答に対する数値は、後に反転させ、その結果を表4に示した。なお、各項目における質問の順序は、無作為に配置されている。

4.4 質問紙実施方法

テスト実施に際し、事前に管理職の承諾を得た。クラスごとに2023年11月、及び2024年6月の学活の時間等を用いて実施した。MicrosoftのFormsのリンクを本校卒業生に送付し、各自の端末から回答した。

4.5 自由記述回答の分析

自由記述データについてテキストマイニングを実施した(KH coder Ver.3. Beta.32c, KH coder については樋口, 2014, を参照)。まずは、これらのテキストデータを分析が行えるように形式を整えた。句読点は「、」「。」に統一した。入力ミスや変換ミス、あるいは誤字脱字があれば、元データが伝える意味を崩さないことを確認した上で修正した。例えば、「話す」と「はなす」といった漢字表記と仮名表記がテキストデータには見られたが、この場合は意味内容が変わらないことを確認して「話す」と漢字表記に統一した。「ですます調」などの文体についての修正は行わなかった。以上の作業の後、分析用のデータとしてExcel形式で再保存をした。円で示されたものがノード(node)と呼ばれ、いわゆる単語のことを指す。大きい円は小さい円より出現頻度が高いことを示している。次に、円と円を結ぶ線はエッジ(edge)と呼ばれ、結ばれた円同士の境域の度合いが結ばれていない線よりも強いことを表している。両図ともいくつかのグループに色分けされているが、これは比較的強く互いに結びついている単語同士がグループとして検出されたものである。本校卒業生である中1と中2、それぞれの抽出語について共起ネットワーク分析を行い、図4, 5を描いた。

V 研究の結果と考察

5.1 質問調査紙

参加者105名のWTC、国際的志向性、動機づけについて、質問項目ごとの結果を学年別に以下に示す。6件法の平均値である3.5よりも上回ったのが12項目中10項目であった。特に動機づけ①②の項目について、他より高い数値が確認できる。このことから、実践から1・2年が経過しても、マレーシアの児童とのオンライン交流は生徒の心に強く印象付けられ、この実践が後の英語

学習への意欲を促進している可能性が示唆される。WTC①②に対しても、平均値以上の数値が確認され、オンラインの交流相手に限らず、コミュニケーションをとろうとする気持ちが高められていると考えられる。国際的志向性①については平均値を超えたものの、国際的志向性②については中1中2の両者とも平均以下の数値が示された。これは、短期的な海外経験には関心がありつつも、住む場所を変更するといった大きな変化には抵抗感を感じている可能性が読み取れる。

表4 各概念の記述統計量

WTC① (平均値及び標準偏差)		
R5 中1	4.2	1.43
R5 中2	4.5	1.20
WTC② (平均値及び標準偏差)		
R5 中1	3.8	1.58
R5 中2	4.3	1.36
国際的志向性① (平均値及び標準偏差)		
R5 中1	3.5	1.82
R5 中2	3.7	1.42
国際的志向性② (平均値及び標準偏差)		
R5 中1	2.7	1.28
R5 中2	2.9	1.45
動機づけ① (平均値及び標準偏差)		
R5 中1	4.4	1.35
R5 中2	4.9	1.21
動機づけ② (平均値及び標準偏差)		
R5 中1	4.2	1.21
R5 中2	4.5	1.16

5.2 自由記述

図4：小学校の外国語学習が楽しかった理由（中1）

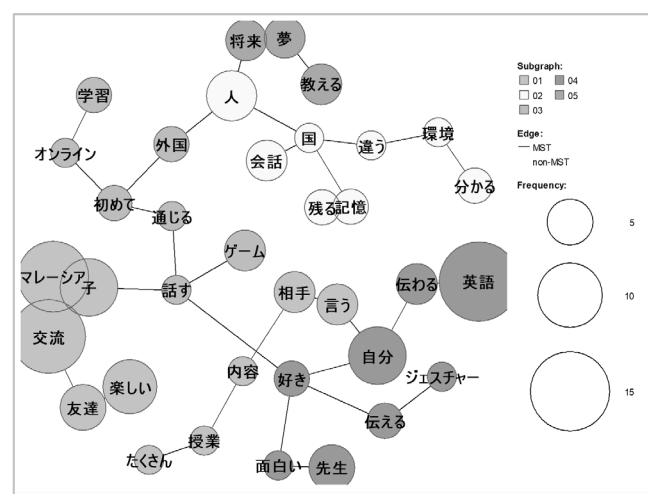


図4は、中1の自由記述の共起ネットワークである。この図で一番目を引くのは、「マレーシア」「交流」とい

う語が最も大きく描かれて位置し、「子」「楽しい」「友達」、「英語」「伝わる」「自分」と線で結ばれていることであろう。このことから、オンライン交流から1年後の生徒の心情にも肯定的に残っていることが読み取れる。また、「ゲーム」「話す」「通じる」というつながりから、かるた等の単語をインプットするためのゲーム活動ではなく、友だちと自分のことを伝えあったインタビュー活動等が想起される。「教える」「伝える」「分かる」「通じる」などの言葉の表出から、言い方を覚えることを中心とした活動から、実際に英語を使った体験についての自由記述が多いということも読み取れる。

見逃してならないのは、共起ネットワークに表出しなかった少数意見である。「友達とたくさん交流できるので英語の授業は好きだが、一人で発表するのが嫌だった」という回答や、「英語が話せないし書けないから」という回答も見られた。教師はこのネガティブな意見を大切に、自身の授業を省察するとともに、個別最適な支援を心掛ける必要がある。

図5：小学校の外国語学習が楽しかった理由（中2）

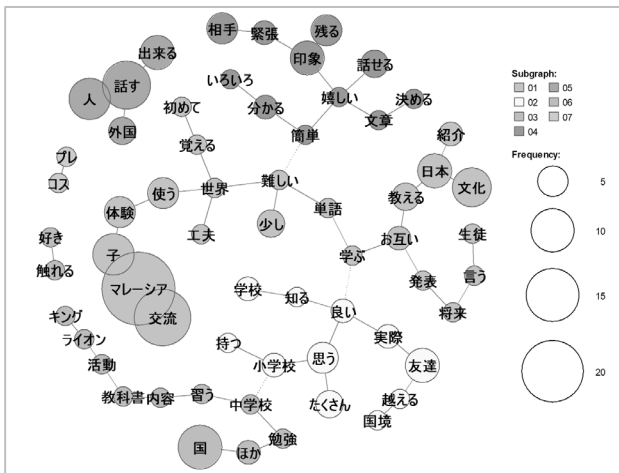


図5は中2の自由記述の共起ネットワークである。この図で一番目を引くのは、「マレーシア」「交流」「子」という語が最も大きく描かれて位置し、同じカテゴリーに「日本」「文化」「紹介」と表れている。続いて「話す」「人」「外国」「出来る」という語のまとまりが大きく描かれている。

クラスターが7個あるうちの5つは、オンライン交流に関わる事柄となっていることから、実施から2年が経過した今でも、マレーシアの小学生とのオンライン交流は、小学校の英語学習について大きな印象として残っている。「少し」「難しい」や「緊張」などのネガティブな言葉が、楽しい要因の中に出現することは、興味深い現象として捉えられる。これは、学習や経験において楽しいと感じる瞬間には、必ずしも全てが順風満帆でなく、挑戦や困難も含まれることを示唆している。

VI 研究の成果と課題

海外の児童とのオンライン交流は、児童・生徒の情面に肯定的な影響を与え、その効果の持続性が示された。今後は質問紙調査に加え、インタビューや行動観察を行うことで、データの信憑性を高めていく必要がある。

児童生徒の異文化コミュニケーション能力や外国語学習へのモチベーションを高めるものは何か。筆者は、本実践のような内容に重きを置いた体験的な学習がかぎになると考える。児童・生徒は言語の学習者であると同時に使用者であってほしい。完璧でなくても、今ある力で英語を使っていく。そして、相手に伝わったという経験が、英語学習への内発的動機づけになっていくであろう。

オンライン交流は、日本を含む EFL 環境において、自然な英語使用を促進する場として期待される。今後は、県内の希望する教師が海外との交流を実現できるようなプラットフォームの構築を目指したい。現段階では、教育委員会などの行政機関の協力を得て姉妹校との交流を行うことや、ALT 派遣会社が提供する交流サービスを活用することが現実的な方法である。本研究が、今後の研究や実践において有益な示唆を提供できれば幸いである。

VII 参考文献

Dörnyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge University Press.

Koizumi, R., & Matsuo, K. (1993). A longitudinal study of attitudes and motivation in learning English among Japanese seventh-grade students. *Japanese Psychological Research*, 35, 1-11.

Nishida, R. (2012). A longitudinal study of motivation, interest, can-do and willingness to communicate in Foreign Language Activities among Japanese fifth-grade students. *Language Education & Technology*, 49, 23-45.

Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *Modern Language Journal*, 86, 55-66.

Yashima, T., Zenk-Nishide, L., & Shimizu, K. (2004). The influence of attitudes and affect on willingness to communicate and L2 communication. *Language Learning*, 54, 119-152.

白井恭弘. (2017). 『外国語学習の科学～第二言語習得論とは何か』岩波新書

ドルニエイ. ゴルダン. (2006). 『外国語教育のための質問紙調査入門』松人社（八島智子/竹内理 監訳）

中村恵美. (2021). 「グローバルな時代と共に生き抜く児童の育成～タスク・ベースを意識した外国語学習の実践を通して～」

中村恵美. (2022). 「世界の人々と共存しようとする児童の育成～心と技能を育てる協働的な学びと個別最適な学びの実践～」

中村恵美. (2023a). 「英語教育は国境を越えてー海外の友達とオンライン交流」『英語教育 2023 年 8 月号別冊 英語教師のためのアナログ×デジタル活用ガイド』, 28.

中村恵美. (2023b). 「海外の小学生とのオンライン交流プロジェクト - 英語教育は国境を越えて」『英語教育』72 (9), 24-25.

樋口耕一(2014). 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版

山森光陽 (2004). 「中学校 1 年生の 4 月における英語学習に対する意欲はどこまで持続するのか」『教育 心理学研究』第 52 号, 71-82.